『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第 21 巻　第３号　2019年２月　１頁～ 18頁

ノーベル賞の国際政治学

――ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究（１）――

吉　武　信　彦

International Politics of the Nobel Prize:

The Nobel Prize in Literature and Japan, an Introductory Study of the Japanese Candidates for the Nobel Prize from 1958 to 1967 (1)

Nobuhiko YOSHITAKE

要　旨

本稿は、ノーベル文学賞と日本との歴史的関係に焦点をあて、ノーベル文学賞研究をめぐる視点とこれまでの研究動向を整理した上で、1958年から1967年までの期間における日本人候補の推薦状況、著作の翻訳状況を明らかにすることを目的とする。これらの作業は、1968年に川端康成が日本人として初めてノーベル文学賞を受賞した経緯を歴史的に解明する前提となるものである。

現在、開示されている1967年までのスウェーデン・アカデミーの選考史料によれば、ノーベル文学賞の候補になっていた日本人は､川端（推薦年1961 ～ 1967年）以外にも賀川豊彦（1947年、1948年）、谷崎潤一郎（1958年、1960 ～ 1965年）、西脇順三郎（1958年、1960 ～ 1967年）､三島由紀夫（1963 ～ 1965年､1967年）の４名がいた。1968年の川端の受賞を考えるには、1958年以降の10年間における川端、谷崎、西脇、三島の選考に注目する必要がある。特に、1960年以降、川端、谷崎、三島は選考において有力候補として挙げられることもあった。

これら３候補の主要著作は、1950年代中葉から英語、ドイツ語、フランス語に精力的に翻訳された。さらに英語版、ドイツ語版を元にしたスウェーデン語版も刊行されている。スウェーデン･アカデミーは基本的にこれら４言語の翻訳版を選考材料に利用したと考えられる。特に、英語版の翻訳者であるサイデンステッカー、キーン、ヒベットの果たした役割は大きかった。

キーワード： ノーベル文学賞、スウェーデン・アカデミー、川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫、西脇順三郎、サイデンステッカー、キーン、ヒベット

Summary

This paper aims to clarify both the circumstances of Japanese candidates nominated for the Nobel Prize in Literature and the circumstances of the translated version of their works during the period from 1958 to 1967, with a focus on the historical relation of the Nobel Prize with Japan, after examining the perspectives on the studies of the Nobel Prize in Literature and the previous research trends. This effort is to prepare for a clarification of the process of winning the first Nobel Prize in Literature by Yasunari Kawabata in 1968 from a historical perspective.

According to the references for nomination up to 1967 which is presently disclosed by the Swedish Academy, the Japanese candidates for the Nobel Prize in Literature were Toyohiko Kagawa (nominated years: 1947, 1948), Junichiro Tanizaki (1958, 1960-1965), Junzaburo Nishiwaki (1958, 1960-1967) and Yukio Mishima (1963-1965, 1967) in addition to Yasunari Kawabata (1961-1967). Before discussing the award by Kawabata in 1968, we need to give our attention to the selections for Kawabata, Tanizaki, Nishiwaki and Mishima for ten years after 1958. Importantly, Kawabata, Tanizaki and Mishima were sometimes strong candidates after 1960.

The major works of these three candidates were vigorously translated into English, German and French since the mid-1950s. In addition, they were translated into Swedish based on the English or German version, and published. It is considered the Swedish Academy used the translated works for selection. The translators into English, Edward G. Seidensticker, Donald Keene and Howard Hibbett were definitely played an important role in the selection.
Keywords: The Nobel Prize in Literature, the Swedish Academy, Yasunari Kawabata, Junichiro Tanizaki, Yukio Mishima, Junzaburo Nishiwaki, Edward G. Seidensticker, Donald Keene, Howard Hibbett

はじめに
1　ノーベル文学賞と日本
（1）ノーベル文学賞をめぐる視点
（2）研究動向
2　日本人候補の推薦・選考状況と推薦運動
（1）推薦状況の概観

（２）選考状況の概観　（以上、本号）
（３）推薦運動の概観　（以下、次号）
３　日本人候補の著作翻訳状況
（１）翻訳と選考
（２）谷崎潤一郎の著作翻訳状況
（３）西脇順三郎の著作翻訳状況
（４）川端康成の著作翻訳状況
（５）三島由紀夫の著作翻訳状況
おわりに

はじめに

本稿は、ノーベル文学賞と日本との歴史的関係に焦点をあて、ノーベル文学賞研究をめぐる視点とこれまでの研究動向を整理した上で、1958年から1967年までの期間における日本人候補の推薦状況、著作の翻訳状況を明らかにすることを目的とする。これらの作業は、ノーベル文学賞の選考過程において日本人候補がいかに位置づけられ、最終的に1968年になぜ川端康成が同賞を受賞するに至ったかを歴史的に解明する前提となるものである。

日本人初のノーベル文学賞受賞者は、1968年の川端康成である。物理学賞を受賞した湯川秀樹（1949年）、朝永振一郎（1965年）に次ぐ３人目のノーベル賞受賞者として、著名作家の川端が受賞したことは、当時、大きなニュースになった。文学分野は自然科学分野以上に人々に身近な存在であり、川端の受賞は日本人の注目を集めた。1968年12月の授賞式に羽織、袴で出席した川端の姿はそのノーベル賞受賞演説とともに強い印象を残した。その演説、「美しい日本の私――その序説」は、翌年３月には日本で出版され、多くの人々に読まれた[1)]。日本人の歴代ノーベル賞受賞者の中でも、川端は湯川と並び、特に日本人の間で記憶に残る受賞者であろう。そのため、川端がいかなる経緯で受賞したかについて、現在でも日本人の関心は高い。しかし、川端の受賞に関して現時点でスウェーデン・アカデミーの選考史料は公開されておらず、選出の経緯は不明である。川端を含む1968年分の選考史料は、2019年１月に開示される予定である[2)]。

この川端の受賞を理解するためには、1968年の選考史料を詳細に分析する必要があるが、それだけでは不十分であると考えられる。現在、開示されている1967年までのスウェーデン・アカデミーの選考史料によれば、川端は1961年からノーベル文学賞に連続して推薦されていた。また、川端以外にも日本人が同賞の候補になっていた。すなわち、賀川豊彦（1947年、1948年）、谷崎潤一郎（1958年、1960 ～ 1965年）、西脇順三郎（1958年、1960 ～ 1967年）、三島由紀夫（1963 ～ 1965年、1967年）の４名である[3)]。賀川豊彦は、他の候補よりも10年早くスウェーデン人から推薦され、候補になっていた。しかし、最終選考に残ることはなく、日本人の間でも

賀川の推薦は長く知られることはなかった[4)]。その他の谷崎、西脇、三島の３名は、川端と同時代に推薦され、日本人初の文学賞受賞を川端と競うことになったのである。そのため、1968年の川端の受賞を考えるには、1958年以降の10年間における川端、谷崎、西脇、三島の選考に注目する必要があり、スウェーデン・アカデミーがこれら日本人候補４名に対していかなる見解を有していたか、明らかにする必要があろう。

以上の問題意識から、本稿は1968年の川端の受賞に至る選考過程を解明するために必要となる基礎的情報を整理するものである。まず第１章において、ノーベル文学賞をめぐる視点とこれまでの研究動向を簡単に整理する。次に第２章において、研究対象とする1958年から1967年までの日本人候補の推薦・選考状況の全体像を確認し、さらに推薦運動についても紹介する。第３章においては、日本人候補がスウェーデン・アカデミーで評価されるためには、その著作が欧米の言語に翻訳される必要があるが、その翻訳状況を整理し、さらにスウェーデン・アカデミー・ノーベル図書館の所蔵状況についても紹介する。

1　ノーベル文学賞と日本

（1）ノーベル文学賞をめぐる視点

1901年に始まったノーベル賞は、今や世界で最も権威のある賞となっている。毎年10月から12月にかけて、日本のみならず世界においてノーベル賞の選考結果と受賞者の業績に対して、目が向けられる。選考結果について疑問が出されることはほとんどなく、同賞は学問水準の高さ、文化的魅力の高さを示すものと見られている。

日本においては、ノーベル賞の権威があまりにも高く評価され、絶対的指標とされてきた結果、一種の「神話」ができていると考えられる。特に、ノーベル賞を運営するノーベル財団、受賞者を選考する各選考委員会の意図を考えず、選考結果に一喜一憂することが繰り返されている。この日本の現状は、ノーベル賞に対する認識としてあまりにもナイーブと言わざるを得ない。選考委員会が選考の際にいかなる議論をし、いかなる判断の末に授賞を決めたのか、冷静に見極める必要性がある。ノーベル賞のもつ意義と限界を考え、その役割を改めて評価するというノーベル賞の脱「神話」化が求められているのではないかと思われる。

かかる問題意識に基づき、筆者はこれまでノーベル平和賞と日本との関係に注目し、平和賞候補となった日本人を第二次世界大戦以前から洗い出し、そこでの議論を通じてノルウェー・ノーベル委員会がいかなる日本理解をしていたのかを明らかにした[5)]。同委員会は、賞創設当初は日本を含めてアジアに関して十分な情報を有していなかったが、できる限り情報を集め、審査を積み重ねてきた。その結果、時代とともに、アジアへの知識は選考委員の間に蓄積され、第二次世界大戦後はアジアからも受賞者を出す方向で議論が進んだ。しかし、日本からもアジアからも受賞者は1970年代まで出なかった。ノーベル委員会の求める受賞者像と日本側から推薦された

候補との間にあるギャップはなかなか埋めることができなかったのである。それは、たとえば1965年から３年に亘り推薦された吉田茂元首相の選考に見出すことができる。日本の戦後復興の立役者として吉田を推薦し、受賞の可能性は極めて高いとして運動を継続し続ける日本側に対して、ノルウェー側は１年目には関心を示すものの、その後は過去の人物として高く評価することはなかった[6)]。

本稿では、ノーベル文学賞に焦点を当て、日本人候補の選考過程を明らかにするための基礎的な材料を整理する。ノーベル文学賞は、スウェーデン・アカデミーが選考母体となり、その会員18名の投票で決まることになっている[7)]。その選考では、候補の発表した作品の文学性が純粋に評価され、授賞者が決まると一般には考えられている。当然、作品の高い文学性は問われるが、世界中からノーベル文学賞に推薦される候補はそれぞれ独自の世界観に裏打ちされた高い文学性を有しているものである。その文学性に優劣をつけることは、極めて困難なことであろう。それでは、スウェーデン・アカデミー会員は何を基準にして最終的に多数の候補から授賞者を選び出すのであろうか。それは、文学性をめぐる会員各自の選好を前提にしつつも、さらにその文学性を超えたその他の要因も加味した結果であると考えられる。文学という極めて抽象的な分野において、会員が合議の末にいつ誰をいかなる理由により選出するかは全く恣意的なものでしかない。

では、本稿冒頭で指摘した1968年の川端の受賞はいかなる過程を経て可能になったのであろうか。スウェーデン・アカデミーの選考では、川端の受賞までに川端を含む複数の日本人候補をめぐり紆余曲折があったと考えられる。単純に川端作品の高い文学性が1968年に突然評価されたわけではないであろう。そこには様々な要因が錯綜していたと考えられる。日本人候補を推す日本国内外の推薦者、推薦を後押しする日本政府、賞の「グローバル化」を意図するものの、日本文学、文化について情報不足のスウェーデン・アカデミーなどのアクターがそれぞれの事情を抱えていたであろう。これらアクター間の政治力学の末に、ようやく1968年に川端の受賞に至ったと考えられる。そこには、平和賞以上に言語の壁、文化の壁が横たわり、日本人候補が評価されづらい現実があった。川端の受賞に至る10年間の選考過程を史料に基づき検証することで、川端の受賞の意味がより鮮明になると考えられる。また文学という文化をめぐる国際政治の一端も明らかにできるであろう。

国際政治は単に政治的利益のみをめぐり展開されるわけではない。近年、「ソフト・パワー」といった議論の中で、文化的魅力も重要なパワーの源泉になることが広く受け入れられ[8)]、文化をめぐる国際政治にも注目が集まっている。こうした見方は近年だけではなく、本稿の対象とする1950年代、1960年代においても該当するものであろう。ノーベル文学賞はまさにその文化的魅力を示す材料の１つであり、これをめぐってアクター間の駆け引きが行なわれても不思議ではない。候補を推薦、支援する側にとっても、授賞者を選考する側にとっても、ノーベル文学賞の価値を最大化し、利用するという発想が垣間見られるのである。候補の作品がもつ文学性や世界文学に対する候補の貢献といった文学論も重要であるが、それに加えて賞の選考過程における政

治力学をミクロに分析することもノーベル文学賞の真の姿を知るために必要であろう。それは、ノーベル賞を絶対視し、選考結果のみに注目して一喜一憂する前述のノーベル賞をめぐる「神話」を打ち砕くことにつながると考えられる。

（2）研究動向

ノーベル賞が世界的に注目されているため、同賞について多くの学術的研究があるように思われがちであるが、実際には日本でも外国でもまだ少ないのが現状である。ノーベル賞の創始者、アルフレッド・ノーベルについての伝記、ノーベル賞の概説的紹介、個々のノーベル賞受賞者を紹介した文献は多いが、ノーベル賞の選考過程に焦点を当て、選考側の意図を意識した実証的な研究は極めて少ない。これは、ノーベル財団の史料開示の状況に影響されてきた面が強い。長くノーベル賞の選考過程は秘密にされてきたが、1970年代中葉以降、ノーベル財団は50年ルールに基づき史料を開示するようになった。ただし、これは歴史研究のため研究者に限定的に開示されるのみであり、依然として選考の詳細については不明な点が多い。

ノーベル賞の選考過程に関する歴史研究は、ノーベル賞が100周年を迎えた2000年頃から徐々に本格化した。まずノーベル平和賞に関しては、20世紀前半までの選考過程について、ノルウェー人研究者らによる歴史研究が始まった[9)]。しかし、史料の開示状況と密接に関係するため、20世紀後半以降の選考過程について歴史研究は進展していないのが現状である。そうした中で、筆者は前述のように日本人候補に限定されるものの、1967年までの平和賞の選考過程を解明してきた。

元々、筆者は2003年に拙著『日本人は北欧から何を学んだか』[10)] において日本・北欧関係の歴史を紹介した際、ノーベル賞が果たしてきた役割が極めて大きいことを認識した。同賞は、日本人の北欧イメージを高めた要因の１つとも考えられる。しかし、前述のようにノーベル賞をめぐりその権威を絶対視する「神話」ができていることが気になり、その後、ノーベル賞と日本とのかかわりを歴史的に解明してきた。

自然科学系のノーベル賞に関しては、東京大学の岡本拓司教授が20世紀前半までの日本人候補について精力的に研究している[11)]。生理学・医学賞はカロリンスカ研究所、物理学賞、化学賞はスウェーデン王立科学アカデミーが選考母体となっている。岡本は、これらの機関の開示した史料に基づき、選考において日本人候補がいかに評価されていたかを実証的に明らかにしている。その際、岡本はスウェーデン側の選考そのものよりも、世界中から寄せられる候補の推薦を通じて20世紀の自然科学の発展史、さらにその中での日本の位置づけを検証している。

ノーベル文学賞に関しては、近年、日本人の関心は極めて高く、毎年10月の受賞者発表に注目が集まる。それは作家の村上春樹が受賞するか否かという１点に集中し、極めて日本的な秋の風物詩ともいえる状況になっている。こうした現状はあるものの、ノーベル文学賞受賞者とその作品についても関心は高く、それらを紹介した文献も増えている[12)]。これらは、作家、作品の紹

介を通じて世界文学の潮流を知り、文学を純粋に楽しむためのきっかけを提供しようとするものであり、文学研究として王道を行くものであろう。なお、日本では過去にノーベル文学賞を前面に出し、その受賞者の作品を体系的に紹介するという全集が２度刊行されている。1940年代の『ノーベル賞文学叢書』[13] と1970年代の『ノーベル賞文学全集』[14] である。前者の叢書を宣伝する新聞広告には、「現世紀文学の粋を集めた真の世界文学！読書界に贈る文化の珠玉篇！／世界唯一至高の文学賞たるノーベル文学賞受賞作家の代表的傑作を網羅せる本叢書こそは、現世紀文学の最高水準を示すもので、これこそ真の意味での世界文学である！我国全読書人の知性と教養のための燦然たる芸術の殿堂！」という宣伝文句が躍っている[15]。これは、1940年の段階でノーベル文学賞がすでに「世界唯一至高の文学賞」と認識され、日本でいかに高く評価されていたかを示すものである。また、この叢書が日中戦争、太平洋戦争という非常時にもかかわらず、知性、教養のために世界文学を学ぶという姿勢で刊行され続け、全18巻が完結した点も大変興味深い。

ノーベル文学賞の過去の選考過程に関しては、新聞、通信社等のメディアが近年積極的に報道を行なうようになっている。これは、前述の通り1968年の川端の受賞に至る経緯を知りたいという一般の関心の高まりを反映するものであろう。毎年１月、スウェーデン・アカデミーは50年前の選考について候補リスト、スウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会の報告書などを開示する。それに基づき、50年前に日本人として誰が推薦され、いかなる評価を受けていたか、その概略を報道することが日本のメディアの恒例となっている[16]。

しかし、選考過程を実証的に分析した研究は極めて少ない。筆者が1947年、1948年の日本人候補、賀川豊彦について分析した研究はその数少ないものの１つである[17]。牧師、社会事業家として活躍した賀川は、平和運動家としても活動し、第二次世界大戦後の1954年～ 1956年、1960年の４年に亘りノーベル平和賞の候補になっていた。その賀川は、1947年、1948年にはノーベル文学賞にも推薦されており、筆者はその選考過程をスウェーデン・アカデミーが開示した史料に基づき明らかにした。同アカデミーのノーベル委員会は、社会事業家としての賀川の活動を評価したものの、賀川の文学の完成度については低い評価であった。賀川が社会事業家として世界的に広く知られていたこと、また1930年代に賀川の著作が多数スウェーデン語に翻訳されていたことが、この推薦の背景にあったと考えられる。しかし、報告書まで作成されたが、有力候補になることはなかった。

同じく日本人候補に関する研究として、1963年までの選考過程をスウェーデン・アカデミーの史料に基づき分析した大木の研究もある[18]。大木も1968年の川端の受賞に至る過程に関心をもち、1963年までのスウェーデン・アカデミーの史料を読み込んだ分析を行なっている。それによれば、1963年に外部の専門家として日本文学研究者のドナルド・キーンとエドワード・Ｇ・サイデンステッカーが提出した意見書やサイデンステッカーの翻訳の重要性を指摘している。

文学賞の日本人候補に関するその他の研究では、法政大学の川村湊教授が関係者の証言などを文献から丹念に集め、日本人候補、受賞者の分析、評価を幅広く行ない、さらにノーベル文学賞

の歴史や受賞者の傾向についても論じている[19]。書名に登場する村上春樹についての分析以上に、日本とノーベル文学賞との関係を概観し、さらにノーベル文学賞に関する良い入門書になっている。

最後に、ノーベル文学賞に関する基本資料について指摘しておきたい。ノーベル文学賞の選考情報は、ノーベル財団のホームページを通じて入手することが多い。特に、同財団が50年ルールに基づき公開した史料のデータベース（ノミネーション・データベース）は過去の候補について調査する際の基本資料となる。ただし、同データベースは各年度の候補とその推薦者を調べる際に有益であるが、推薦状の内容、スウェーデン・アカデミー内の選考状況などについての情報は提供していない。そのため、同データベースに依拠しただけでは選考過程の詳細はわからない。

上記のデータベース以外にノーベル文学賞研究の基本資料として、スウェーデン・アカデミーが1901年から1950年までの選考史料をまとめた２巻の文献がある[20]。各年の候補リストと候補に関する簡単なコメント、同アカデミー・ノーベル委員会の報告書が収録されている。日本人候補に関しては、上記の賀川のみ含まれているが、20世紀前半の選考を知る上で貴重なものである。1951年以降の選考史料については、50年ルールの下で毎年開示される史料をスウェーデン・アカデミーにおいて確認するしかない。

2　日本人候補の推薦・選考状況と推薦運動

（1）推薦状況の概観

日本人にとってノーベル賞は長く関心の的になり、特に日本人受賞者が出るか否か、注目されてきた。現在の日本では、日本人の受賞の可能性について過剰なまでに関心が高まり、発表結果に一喜一憂している状況である。自然科学の３賞はもとより、文学賞もこれに該当する。文学賞について言えば、現在、作家の村上春樹が有力「候補」として毎年注目され、本人も「正直なところ、わりに迷惑です」というほどの大騒ぎになるまでエスカレートしている。この点について、村上は「『ノーベル賞候補になっていること』が迷惑だと言っているのではありません」と断ったうえで、「メディア的に大騒ぎされるために、いろいろと煩わしい問題もでてくるので、僕としてはそれが困る」、「僕が候補になっているというのは、あくまでも憶測に過ぎません。ただの賭け屋の憶測で、これだけ大手メディアが動くというのもずいぶんけったいな話だよなあと、僕はいささか首をひねっているだけです」と感想を述べている[21]。この村上の例のように、毎年メディアが大騒ぎを繰り返す結果、一般国民のみならず、候補になりうる日本人も毎年の授賞者発表を意識せざるを得ないであろう。

誰がノーベル文学賞の候補になっているかをスウェーデン・アカデミーが正式に発表することはなく、選考する側も推薦した側も50年間の守秘義務を負っている。そのため、50年が経つ前に誰が候補であったかは、実際の受賞者以外は村上の指摘するようにすべて「憶測」に過ぎない。

しかし、現実にはスウェーデン・アカデミーの授賞者発表前には「候補」の名前が独り歩きし、報道の重点項目になっている。「憶測」に基づく「候補」は、スウェーデン・アカデミー周辺や推薦者側の関係者から出ている可能性が高い。無論、メディアによる全くの「憶測」ということもありうる。

本稿が対象とする1950年代、1960年代の日本人の文学賞候補についても、現在ほどではないにしてもメディアは注目し、具体的な名前を挙げて報道している。それは、基本的に日本のメディアによる独自取材ではなく、欧米の大手通信社が流すストックホルム発のニュースを転載したものである。

たとえば、1957年にはストックホルム発ＵＰ＝共同電に基づき、同年度のノーベル文学賞の選考で谷崎潤一郎、川端康成、芹沢光治良の３名が候補になっていると報道されている。すなわち、「消息筋によると、いまのところ候補のなかにはフランス、イタリア、ギリシャの作家たちとならんで日本の作家の名もあがっている。そのなかには谷崎潤一郎、川端康成、芹沢光治良氏らがふくまれているらしい」とされている[22)]。

1960年にはストックホルム発のＡＰ電に基づき、『朝日新聞』は「ノーベル賞選考の主導権を握るアンデルス・オステルリング博士」が論文において谷崎を「日本の偉大な作家」として推していることから、谷崎が「有力な候補に上っている。作品は『細雪』である」と伝えている。その他の有力候補としては、ユーゴのイーボ・アンドリッチ、デンマークのカレン・ブリクセンの名前を挙げ、ダークホースとしてイギリスのロレンス・ダレルの名前も出ている[23)]。同じＡＰ電により、『毎日新聞』も「欧州以外から受賞者が選ばれる場合には谷崎潤一郎氏の可能性もある」と伝えている[24)]。

1962年３月には、スウェーデンの詩人、スウェーデン・アカデミー会員、ノーベル文学賞選考委員のハリー・マッティンソン（1974年ノーベル文学賞受賞者）が来日し、日本の作家らと懇談した際に、「今年のノーベル文学賞候補に日本の作家三人が上がっている」ことを伝えた[25)]。マッティンソンは具体的な名前については沈黙を守ったが、これを報道した『朝日新聞』は、関係者の話として３名を「谷崎潤一郎、川端康成、それに詩人の西脇順三郎の三氏であることは確実」と見ている[26)]。また、授賞者発表間近の同年10月には毎日新聞がＵＰＩ電に基づき、「消息筋が九日語ったところによるとスウェーデン文学アカデミーでは受賞者候補として五、六十の名前が浮かんでいるが、その中には日本の谷崎潤一郎、川端康成、西脇順三郎の各氏の名前が米国のスタインベック、ビューバー（哲学者）両氏とともに並んでいるといわれる」と報じている[27)]。

1965年には、三島由紀夫が候補になっていることがたびたび報道されている。同年９月下旬にはストックホルム発のＡＰ電に基づき、『朝日新聞』、『毎日新聞』は三島由紀夫が「本年度ノーベル文学賞受賞者の有力候補のひとりにあげられているといわれる」と伝えている[28)]。同じくストックホルム発のＡＰ電に基づく『読売新聞』も、三島由紀夫の名前を挙げつつも、「いまのところ最有力候補はソ連と中南米からの二人のように思われる」と指摘している[29)]。さらに、それ

らの記事の直後に『朝日新聞』は「三島氏は選考に当るスウェーデン王立文学アカデミーの趣味にあうには若過ぎるようである」と述べている。この文章に続けて「同アカデミーは九十人以上にのぼる世界各国からの候補についてなんのヒントも与えていない。候補者のリストは例年通り受賞者が決るまで秘密にされよう」とも述べ、若干矛盾した内容となっている[30)]。授賞者発表直前の同年10月中旬には、「十八人からなるスウェーデン文学アカデミーに近い筋によると、日本の故谷崎潤一郎、三島由紀夫両氏が、受賞選考の最終候補者の中にはいっているといわれる。故谷崎氏は二年前にも有力候補の一人にあげられており、三島氏はその“異国的な”観点からあげられた候補者の一人だという」と述べ、谷崎、三島が最終候補になっていることを伝えている。さらに同記事は「一方、同アカデミーにきわめて近いスウェーデン紙によると、今年六十歳のソ連の老作家ショーロホフ氏の『静かなるドン』が有力といわれる」という指摘もしている[31)]。

1966年の選考についても、『毎日新聞』と『読売新聞』がストックホルム発のＡＦＰ電に基づき、日本人候補について同内容の記事を報じている。「関係筋によればチリの詩人パブロ・ネルダ氏が最有力とみられているが、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫の三氏も有力な候補に上げられている。三島氏はもっとも有名だが、四十一才という年齢の点がハンディキャップになっている」と報じている[32)]。

三島については、1967年にも候補になっているとの報道がある。同年10月、ストックホルム発ＵＰＩ電によれば、「文学賞の部門で三島由紀夫氏（四一）が最有力候補四人の中に含まれているといわれる。他の三人はチリの詩人パブロ・ネルダ（六二）、フランスのアンドレ・マルロー（六六）、アイルランド出身でフランスの作家サミュエル・ベケット（六一）の各氏」と、選考の最終段階を詳細に伝えている[33)]。

以上のように、過去にもノーベル文学賞の「候補」として著名作家の名前がしばしば登場し、メディアによって騒がれていた。そうした作家の全集、著作などにも、ノーベル賞の話題がしばしば登場する。たとえば、1962年に谷崎潤一郎は、雑誌関係者から「ノーベル賞云々ということが、だいぶ騒がれておりますが……」と問われると、「くれるんなら、もらうさ。ありがたくね。でも、そのために運動をしたりすることなどは、ごめんこうむる。がやがや騒ぎたてることはないんじゃないの。ただくれるなら、もらうだけのことさ」と淡々と答えている[34)]。別の雑誌においても、谷崎は「ノーベル賞の評判が高いようですが……」と問われ、「あんまり騒がないでくれよ」と笑って答えたとある[35)]。これらの予測もあくまでも「憶測」でしかなく、断片的な情報でしかなかった。ノーベル文学賞の選考は長くベールに包まれたままであった。

スウェーデン・アカデミーは、選考から50年が経過した分から、正式な候補、選考過程における評価を明らかにしている。現時点では1967年までの候補が判明している。表１は、1967年までにノーベル文学賞に推薦されていた日本人候補のリストである。スウェーデン・アカデミーの史料開示により、候補の全体像がようやく明らかになったのである。

まず1947年、1948年に賀川豊彦が日本人初の候補として推薦されていた。谷崎、西脇は

表１　ノーベル文学賞歴代日本人候補の推薦状況（1947 ～ 1967年）

選考年	日本人候補　＊1				
1947	賀川豊彦	—	—	—	—
1948	賀川豊彦	—	—	—	—
1958	—	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1960	—	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1961		谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1962		谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1963		谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1964		谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1965		谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1966			西脇順三郎	川端康成	—
1967			西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫

＊1　推薦のあった年のみ取り上げた。「—」は推薦なし。空欄は死去に伴い、ノーベル賞受賞資格がないことを示す。
出所　ノーベル財団ノミネーション・データベース　＜https://www.nobelprize.org/nomination/＞およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

1958年以降、川端は1961年以降、三島は1963年以降に推薦され始め、同時期に複数の日本人候補がスウェーデン・アカデミーの選考の対象になっていた。日本人が頻繁に推薦されていたことがわかる。

候補に関する上記の新聞報道は、どの程度正確であったのであろうか。たとえば、1957年に谷崎、川端、芹沢が候補になっていたというのは、全くの誤りであった。谷崎は1958年に推薦されていた。川端はまだ推薦されておらず、芹沢については1967年まで一度も推薦されていなかった。1960年の谷崎の推薦は、報道の通りである。また、1962年に選考委員のマッティンソンがもたらした日本人候補３名との情報は報道の通り正確であり、それが谷崎、西脇、川端という『朝日新聞』の予測も正しいことが確認できる。1965年に谷崎、三島が推薦されていたことは正しいが、実際にはその他に川端、西脇も推薦されていた。1966年には谷崎、川端、三島の３名が推薦されていると報道されたが、谷崎はすでに死去しており、選考の対象外となっていた。川端は推薦されていたが、三島は推薦されていなかった。その他、西脇が推薦されていたが、これは報道から漏れている。1967年には三島が報道通り推薦されていたが、西脇、川端が抜け落ちていた。「有力候補」であったか、否かという選考時のスウェーデン・アカデミーの評価については、次節で検討する。

以上のように、報道と実際の候補とを比較すると、報道が完全に正確な年（1962年）もあったが、完全に誤った年（1957年）、若干誤った年（1966年）、候補の一部のみを報道していた年（1960年、1965年、1967年）、全く報道していない年（1958年、1961年、1963年、1964年）もあった。ノーベル賞の場合、選考の情報は厳しく管理されており、「候補」報道は不正確、断片的にならざるを得なかった。

ここで簡単に推薦資格についても指摘しておきたい。ノーベル文学賞の推薦資格は、①スウェーデン・アカデミー会員およびスウェーデン・アカデミーと同種の会員、目的を有する各国アカデミー、機関、団体の会員、②各国の文学、言語学の大学教授、③ノーベル文学賞の歴代受賞者、④各国の文学活動を代表する作家協会の会長である[36)]。主な有資格者にはスウェーデン・アカデミーから推薦依頼状が送付されるが、これらの資格を満たしていれば、推薦依頼状に関係なく、推薦者の推薦状は有効である。なお、文学賞を含めてノーベル賞のすべての分野で、自分自身を推薦することは認められていない。

上記の報道にあった通り、1962年３月５日、日本訪問中のスウェーデン・アカデミー会員の詩人、ハリー・マッティンソンは、川端康成ら日本の作家たちと懇談した。その際、マッティンソンは推薦方法に関して日本側に助言をしている。それによれば、「今年のノーベル文学賞候補に日本の作家三名が上っていること、しかし日本の推薦機関が弱体なので、きわめて不利であること、そのため早急に権威ある推薦委員会を設けるべきである」ことを求めている。マッティンソンの案によると、具体的に「この推薦委員会は、日本の権威ある文学、芸術団体がえらんだ三人の委員で構成され、その “三人委員会” が、同賞候補作家三人を選んで駐日スウェーデン大使に手渡し、ストックホルムのノーベル賞委員会は、それを有力な根拠として検討するということになっている」とされ、「このような推薦委員会の推薦があれば、日本作家の受賞の可能性は、かなり濃くなるだろうと語った」のである[37)]。マッティンソンは、上記の推薦資格の④にあたる作家協会の会長を想定していたと考えられる。マッティンソンの意向は、駐日スウェーデン大使から私文書の形で外務省に申し入れがなされ、その写しが外務省から日本芸術院第２部、日本ペンクラブ、日本文芸家協会に配布されている[38)]。

これを受けて、実際にこれら３団体は推薦委員を各１名選出し、日本から推薦するノーベル文学賞候補を調整することになった。日本芸術院第２部（文芸）からは部長の久保田万太郎、日本ペンクラブからは会長の川端康成、日本文芸家協会からは理事長の丹羽文雄の３名が指名された[39)]。

しかし、各団体内で「三人委員会」への代表を選出するにあたり、紛糾した団体もある。たとえば、同年４月初めの日本文芸家協会内の議論では、作家の亀井勝一郎が「三人委員会」への参加、さらにノーベル文学賞に対しても厳しい批判を展開している。当時、日本の文壇においてノーベル文学賞に対して多様な意見があったことがわかるものであり、以下に引用しておきたい。

「そもそもこの種の推薦団体は外国にもあるのか。また日本ペンは参加するのが当然だが、協会はやってはいけないことだ」と、ペンと協会の性格の違いから反対し、さらに「パール・バックの『大地』より林芙美子の『放浪記』が、ラッセルよりは鈴木大拙の方がすぐれている。バレリーがもらわずにジイドにいっているのも変だ。そもそもノーベル文学賞選考委員は文学がわかっていないのではないか」という痛烈な発言までした[40)]。

結局、文芸家協会の大勢は「三人委員会」への参加を決めたが、それへの代表の選出に関しては継続審議となっている。その際、日本ペンクラブの副会長でもある評論家の伊藤整からは、「ノーベル文学賞は一種の美人投票。国際的なつきあいと考えれば、会の内部にも外部にも責任を持つことはなく形だけでよいのだから、やはり代表者の丹羽理事長に全権委任するのが適当」といった発言も出ている[41)]。文芸家協会は翌５月の理事会で丹羽理事長を「三人委員会」への代表に選出している[42)]。

以上、文芸家協会における代表選出をめぐる紛糾について紹介したが、発足した「三人委員会」は結局３名の代表が集まり、ノーベル文学賞への推薦者を調整することはなかった。それぞれの団体の代表が個別に推薦状を出すことになった。同年６月26日、「三人委員会」はそれぞれの推薦リストを外務省の石川文化課長に手交し、スウェーデン側に提出してもらうことになった[43)]。代表の一人、久保田万太郎は、「三人で相談はしないことにした。私は作品を一つだけ選んだが、推薦理由も何も書いていない。ほかの人が何を何編推薦したか知らない」と述べている。

日本から作家団体がノーベル文学賞候補をまとめて出すことを求めたマッティンソンの助言は、必ずしもうまく活かされなかったのである。特定の作家、文学作品を日本の代表として選ぶことのむずかしさ、ノーベル文学賞への不信といったものが背景にあったと考えられる。1962年４月17日、「三人委員会」をめぐる紛糾を見て、川端康成は三島由紀夫への書簡において、「ノオベル推せん委員もたつきはおもしろいですね　日本側が気乗りしないらしいフランス作家たちが日本を推すとパリから手紙が来たりしました　まああなたの時代まで延期でせう」と記しており、ノーベル賞への日本人の推薦、受賞が三島らの次の世代の話になると冷めた目で見ている[44)]。翌年以降、作家３団体がノーベル文学賞候補を共同で出す動きは見られない。

1960年代における日本からの推薦について、誤解を生む報道もある。1969年２月の『朝日新聞』によれば、日本ペンクラブ会長の芹沢光治良が「ノーベル文学賞候補の推薦委員に選ばれた」とされ、芹沢は「昨年暮れスウェーデン・アカデミーから英仏両国語で『あなたを一九六九年度ノーベル文学賞候補の指名に招待する』という手紙を受取った」と発言し、さらに「返事はまだ出しておりませんが、これはお受けするのが当然だと思っています。世界中で数人の方々に手紙が出されているようです」とも述べている[45)]。

同様の報道は、『毎日新聞』にもあり、「同アカデミーでは毎年ノーベル文学賞選考に当たって世界各国の代表的作家・評論家数人に候補の推薦を依頼している。今回は川端康成氏が受賞したことに関連し特に日本にも参考意見を求めることになったものとみられる」、「正式に同アカデミーから委嘱があったのははじめて」とされている[46)]。『読売新聞』も、「この推薦委員は、同アカデミーから、毎年受賞者選考に先立ち世界中で数人が委嘱されるもの」と説明し、1962年の「三人委員会」に続いて「日本の作家としては二度目」としている[47)]。

芹沢については、1972年にも「一九七三年度のノーベル文学賞の推薦委員（日本文学部門）を委嘱された」、「“ご指名”は数年ぶりに二度目のこと」とする記事が出ている[48)]。

これらは、芹沢の誤解によるものである。スウェーデン・アカデミーは、ノーベル文学賞候補の推薦に関して、世界中から数人に委嘱することはない。同アカデミーから芹沢個人宛てに届いたとされる依頼は、同アカデミーが世界中のノーベル文学賞推薦有資格者に大量に配布する回章であろう。これには、推薦の依頼とともに、推薦の締め切り、郵送先などの情報が記されている。芹沢は、当時日本ペンクラブ会長を務めており、スウェーデン・アカデミーは推薦有資格者の日本ペンクラブ会長にもこの回章を送ったにすぎない。

この回章は、第二次世界大戦前から日本に何度も届いている。日本ペンクラブにも1950年２月、スウェーデン・アカデミーから推薦依頼が届いたことが報じられており、当時の日本ペンクラブ会長の「日本ペンクラブにとっても現代日本文学にとっても大変喜ばしい」とのコメントが載っている。ただし、すぐに同年度の締め切りを過ぎていたことが判明し、「結局ノーベル文学賞など大それたことは当分望まず、自然によい作品が出てくるのをゆっくり待とうということになった」のである[49)]。

（２）選考状況の概観

次に、日本人候補をめぐる選考の全体像についても整理するが、簡単にスウェーデン･アカデミーと選考の流れについても紹介しておきたい。

ノーベルは、1895年の遺言状においてノーベル賞の原案を提案していたが、それによれば、文学賞については「文学で理想主義的な傾向の最もすぐれた作品を創作した人物」に与えられることになっていた。ノーベル賞創設当初は「理想主義的な傾向」を字義通りに厳密に解釈していたが、その後、時代とともに柔軟に考えるようになっている。また、遺言状で文学賞の選考母体とされていた「ストックホルムのアカデミー」は、スウェーデン・アカデミーとして処理され、同アカデミーが選考を担うことになった。同アカデミーは、1786年に国王グスタフ３世によってフランスのアカデミー・フランセーズ（学士院）をモデルとして創設され、スウェーデンにおける言語学、文学の研究を奨励する学界最高機関と位置づけられている。会員の18名は、言語学、文学の分野で同国を代表する文学者、作家、詩人などによって構成されている。

ノーベル文学賞の選考の流れは、以下の通りである。スウェーデン・アカデミーは、前年の９月にノーベル文学賞推薦の依頼状（回章）を世界中の関係者に発送する。推薦状の締め切りは、翌年１月31日である。選考の中心的な作業は、アカデミー内のノーベル委員会によって進められる。ノーベル委員会は、スウェーデン・アカデミーの会員４～５名（互選、３年交替）からなる組織である。まずノーベル委員会は推薦者の資格を審査し、２月初旬に有資格者の推薦した全候補リストをアカデミー例会（毎週木曜日開催）に示し、承認を得る。その後、ノーベル委員会が候補を絞り込んでいく。各委員は推薦された候補について文学的価値などを詳細に調査する。候補の著作を検討する際、欧米以外の言語の場合にはスウェーデン語への試訳、分析評価を専門家に依頼することもある。委員会は、４月に候補を15名～ 20名程に絞った仮リストをアカデミー

例会に提案し、承認を受けたうえで、さらに候補の絞り込み作業を継続する。最終的に、委員会は５月末に有力候補約５名の最終リストをまとめ、アカデミー例会に提示する。その後、夏休みが終わるまでに、アカデミー会員はそのリストに載った候補の作品を読み進め、ノーベル委員会委員は秋のアカデミー例会用に各候補に関する報告書を準備する。夏休み明けの９月中旬以降、アカデミー例会で候補についての議論が行なわれ、最終的に10月初めのアカデミー例会で受賞者が決定される。決定には、アカデミー会員による投票で、投票総数の過半数の得票が必要である。決定後、スウェーデン・アカデミーから受賞者が発表されることになる[50)]。

以上の選考の流れを踏まえ、1958年から1967年までの日本人ノーベル文学賞候補の選考の状況を考えてみよう。表１で示した通り、この期間に谷崎、西脇、川端、三島の４名がいた。候補の総数は、1958年が41名と少ないが、1960年代には徐々に増え、1965年には90名にもなっている。ノーベル文学賞への注目度の高まりとともに、候補の推薦も増えたのであろう。

表２のショートリスト選出状況は、候補の絞り込みの状況を示し、アカデミー会員により本格的に作品が吟味される有力候補の段階を取り上げた。総候補数の約１割にまで絞り込まれており、最終段階といってもよいものである。ノーベル委員会はそこからさらに上位数名を選び、順位をつけた上で報告書を会員全体の審議にかけるのである。報告書は、ノーベル委員会として１つの順位づけを記すこともあれば、委員により見解の相違があった場合には異なる順位づけを併記することもある。なお、この順位通りにスウェーデン・アカデミーが授賞者を決定する訳ではない。全体審議の結果、提案とは異なる最終結果となることもある。

日本人候補でこの最終段階まで残った事例は、以下の通りである。

谷崎潤一郎　1960年、1964年
川端康成　　1966年、1967年
三島由紀夫　1963年、1967年

４名の候補のうち、３名が２度ずつ残っている。これらの候補は、スウェーデン・アカデミー会員によって作品が吟味され、審議に付されたと考えられる。特に、３名のうち、最終の順位付けまで進んだのは、1966年、1967年の川端である。それぞれ４名中の第１位、３名中の第２位であった。1968年に川端が受賞したことを考えると、その直前の２年間は極めて受賞に近いところに位置づけられており、いつ受賞してもおかしくない状況であったと解釈できる。

また、３候補の絞り込まれた時期に注目すると、1965年を境に谷崎が有力候補と見られていた時期と川端が有力候補と見られた時期に分けることができる。三島は、その２つの時期にまたがるように一貫して有力候補となっていた。1965年は、谷崎が亡くなった年である。ノーベル文学賞は、現在、授賞者発表の時点で生存している者に授与されることになっている。発表後に死去した場合は、予定通り授与される。しかし、本稿で取り上げる1950年代、1960年代については、この原則がまだできていなかった。候補として推薦されていれば、発表前の選考中に死去した場合、賞を授与することは可能であった。実際に発表時に死去していた者に授与した例とし

表２　ノーベル文学賞歴代日本人候補の選考状況（1947 ～ 1967年）

選考年	日本人候補	候補総数	ショート・リスト選出状況*1	受賞者（出身国）
1947	賀川　豊彦	35	無	アンドレ・ジッド（フランス）
1948	賀川　豊彦	31	無	Ｔ・Ｓ・エリオット（イギリス）
1958	谷崎潤一郎	41	無	ボリス・パステルナーク（ソ連）辞退
	西脇順三郎		無	
1960	谷崎潤一郎	58	６名に残るが、最終４名には入らず	サン＝ジョン・ペルス（フランス）
	西脇順三郎		無	
1961	谷崎潤一郎	56	無	イヴォ・アンドリッチ（ユーゴスラヴィア）
	西脇順三郎		無	
	川端　康成		無	
1962	谷崎潤一郎	66	無	ジョン・スタインベック（アメリカ）
	西脇順三郎		無	
	川端　康成		無	
1963	谷崎潤一郎	80	無	ギオルゴス・セフェリス（ギリシャ）
	西脇順三郎		無	
	川端　康成		無	
	三島由紀夫		６名に残るが、最終３名には入らず	
1964	谷崎潤一郎	76	６名に残るが、最終２名には入らず	ジャン＝ポール・サルトル（フランス）辞退
	西脇順三郎		無	
	川端　康成		無	
	三島由紀夫		無	
1965	谷崎潤一郎	90	無	ミハイル・ショーロホフ（ソ連）
	西脇順三郎		無	
	川端　康成		無	
	三島由紀夫		無	
1966	西脇順三郎	72	無	シャムエル・アグノン（イスラエル）、ネリー・ザックス（スウェーデン）
	川端　康成		６名に残り、最終５名の第１位となる	
1967	西脇順三郎	70	無	ミゲル・アストゥリアス（グアテマラ）
	川端　康成		７名に残り、最終３名の第２位となる	
	三島由紀夫		７名に残るが、最終３名には入らず	

註１　ショートリストとは、スウェーデン・アカデミー会員が関心をもち、さらに調査をするため絞り込んだ候補リストをいう。同アカデミーのノーベル委員会は最終的にそのうち数名に順位をつけてアカデミーの全体会議に提案する。

出所　ノーベル財団ノミネーション・データベース　＜https://www.nobelprize.org/nomination/＞およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

ては、1931年文学賞のカールフェルト、1961年平和賞のハマーショルドの２例がある[51)]。しかし、その後、1974年にノーベル財団規約が改正され、発表前に死去した者への授与は認められなくなった[52)]。

（よしたけ　のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授）

註

1）川端は、1968年10月17日にノーベル文学賞受賞の知らせをスウェーデン・アカデミーから受けた。同年12月10日にスウェーデン・ストックホルムでの授賞式に出席し、同月12日に以下の受賞演説を行なった。「美しい日本の私――その序説」, “Japan, the Beautiful and Myself,” *Les Prix Nobel, en 1968* (Stockholm: P. A. Norstedt & Söner, 1969), s. 242-260. 川端康成『美しい日本の私――その序説』エドワード・Ｇ・サイデンステッカー訳（講談社現代新書、1969年）。

2）スウェーデン・アカデミーは、ノーベル財団規約第10条に基づき、50年ルールで史料の開示を行なっている。“Statutes of the Nobel Foundation,” ＜https://www.nobelprize.org/about/statutes-of-the-nobel-foundation/＞, 28 September 2018.

3）ノーベル財団ノミネーション・データベース　＜https://www.nobelprize.org/nomination/＞。

4）拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル文学賞と日本：日本人初の文学賞候補、賀川豊彦」（1）、（2・完）『地域政策研究』（高崎経済大学）第16巻第１号、2013年８月、第16巻第３号、2014年２月。

5）拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本:序説」『地域政策研究』第12巻第４号、2010年３月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補」『地域政策研究』第13巻第２・３号、2010年11月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞の歴史的発展と選考過程」『地域政策研究』第13巻第４号、2011年２月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本:第二次世界大戦前の日本人推薦者」『地域政策研究』第14巻第２・３号、2012年１月。同「ノーベル平和賞と日本――歴代日本人受賞者・候補者が問いかけるもの」『世界』第837号、2012年12月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦」(1)、(2・完)『地域政策研究』第15巻第２号、2013年１月、第15巻第４号、2013年３月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：1960年代前半の日本人候補」『地域政策研究』第17巻第２号、2014年11月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人推薦者」(1)『地域政策研究』第17巻第３号、2015年１月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞研究の課題」岡澤憲芙編『北欧学のフロンティア――その成果と可能性』ミネルヴァ書房、2015年。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人推薦者」(2)『地域政策研究』第18巻第２・３合併号、2016年１月。

6）拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：吉田茂元首相の推薦をめぐる1965年の秘密工作とその帰結」『地域政策研究』第18巻第４号、2016年３月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：吉田茂元首相の推薦をめぐる1967年の秘密工作」『地域政策研究』第19巻第１号、2016年８月。同「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：吉田茂元首相の推薦をめぐる1966年の秘密工作とその帰結」『地域政策研究』第19巻第４号、2017年３月。

7）ノーベル文学賞の選考過程については、以下を参照。前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル文学賞と日本：日本人初の文学賞候補、賀川豊彦」(1)、９～10頁。“Nomination and Selection of Literature Laureates,” ＜https://www.nobelprize.org/nomination/literature/＞, 28 September 2018.

8）ジョセフ・S・ナイ『ソフト・パワー――21世紀国際政治を制する見えざる力』山岡洋一訳（日本経済新聞社、2004年）、34頁。

9）たとえば、Ivar Libæk, “The Nobel Peace Prize: Some Aspects of the Decision-Making Process, 1901-17,” *The Norwegian Nobel Institute Series,* Vol.1, No.2, 2000. Øivind Stenersen, “The Nobel Peace Prize: Some Aspects of the Decision-Making Process, 1932-39,” *The Norwegian Nobel Institute Series,* Vol.1, No.4, 2000. Asle Sveen, “The Nobel Peace Prize: Some Aspects of the Decision-Making Process, 1919-31,” *The Norwegian Nobel Institute Series,* Vol.1, No.3, 2000.

10）拙著『日本人は北欧から何を学んだか――日本・北欧政治関係史入門』（新評論、2003年）。

11）たとえば、岡本拓司「ノーベル賞文書からみた日本の科学、1901年－1948年――（I）物理学賞・化学賞」『科学技術史』第３号、1999年。同「ノーベル賞文書からみた日本の科学、1901－1948年――（II）生理学・医学賞（北里柴三郎から山際勝三郎まで）」『科学技術史』第４号、2000年。同「日本人とノーベル物理学賞:1901年―1949年」『日本物理学会誌』第55巻第７号、2000年。同「山際勝三郎の非受賞が教えたこと」『学術月報』第55巻第３号、2002年３月。同「戦前期日本の医学界とノーベル生理学・医学賞――推薦行動の分析を中心に」『東京大学教養学部哲学・科学史部会　哲学・科学史論叢』第４号、2002年１月。同「戦前期の日本の化学とノーベル賞――ノーベル賞選考資料から」『現代化学』第382号、2003年１月。同「日本の物理学とノーベル賞――湯川秀樹と朝永振一郎の受賞まで」『現代思想』第44巻第12号、2016年６月。

12）たとえば、橋本陽介『ノーベル文学賞を読む――ガルシア＝マルケスからカズオ・イシグロまで』（角川選書、2018年）。柏倉康夫『ノーベル文学賞――「文芸共和国」をめざして（増補新装版）』（吉田書店、2016年）。

13）『ノーベル賞文学叢書』全18巻（今日の問題社、1940～1942年）。同叢書の詳細は、以下を参照。拙稿「ノーベル賞の国際政治学――第二次世界大戦以前の日本におけるノーベル賞の受容」『地域政策研究』第20巻第2号、2017年10月、22～24頁。

14）『ノーベル賞文学全集』全24巻、別巻１（主婦の友社、1970～1972年）。なお、1974年に第25巻、1976年に第26巻が追加されている。

15）「ノーベル賞文学叢書　全十八巻」『東京朝日新聞』1940年5月20日朝刊。

16）たとえば、以下の通り。「三島　67年にも有力候補　ノーベル文学賞　川端受賞の前年」『毎日新聞』2018年１月５日朝刊。「1967年のノーベル文学賞　三島由紀夫も有力候補　最終、『川端』理由に漏れる」『日本経済新聞』2018年１月４日朝刊。ノーベル賞に関するメディア関係者の文献としては、以下もある。同書は、ノーベル賞の舞台裏を豊富な取材で明らかにし、ノーベル文学賞の日本人候補についても紹介している。共同通信ロンドン支局取材班編『ノーベル賞の舞台裏』(ちくま新書、2017年)。

17）前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル文学賞と日本：日本人初の文学賞候補、賀川豊彦」(1)、(2)。

18）大木ひさよ「川端康成とノーベル文学賞――スウェーデンアカデミー所蔵の選考資料をめぐって」(『京都語文（佛教大学国語国文学会)』第21号、2014年11月。

19）川村湊『村上春樹はノーベル賞をとれるのか？』(光文社新書、2016年)。

20）Bo Svensén, *Nobelpriset i litteratur: Nomineringar och utlåtanden 1901-1950, Del I 1901-1920, Del II 1921-1950* (Stockholm: Svenska Akademien, 2001).

21）村上春樹『村上さんのところ』(新潮社、2015年)、５、76～77頁。

22）「ノーベル文学賞候補に谷崎、川端、芹沢三氏も　文学賞」『朝日新聞』1957年10月４日朝刊。同じ内容の記事は、以下

にもある。「谷崎、川端、芹沢氏らも　ノーベル文学賞候補に」『毎日新聞』1957年10月４日朝刊。「谷崎氏らも候補　ノーベル文学賞受賞者選考」『読売新聞』1957年10月４日朝刊。

23)「ノーベル文学賞候補に谷崎氏も」『朝日新聞』1960年10月16日朝刊。

24)「谷崎潤一郎氏もノーベル文学賞の可能性」『毎日新聞』1960年10月16日朝刊。

25)「日本から三作家　ノーベル文学賞候補　マーチンソン選考委談」『朝日新聞』1962年３月６日朝刊。「日本人作家三人も候補に　ノーベル文学賞について語る　スウェーデン作家マーチンソン氏」『毎日新聞』1962年３月６日朝刊。

26)「ノーベル文学賞をめぐって　権威ある推薦機関を」『朝日新聞』、1962年３月12日朝刊。

27)「日米の五作家に呼び声　ノーベル文学賞候補」『毎日新聞』1962年10月11日朝刊。

28)「三島氏、有力候補に　ノーベル文学賞」『朝日新聞』1965年９月25日夕刊。「三島由紀夫氏が有力候補に　ノーベル文学賞」『毎日新聞』1965年９月25日夕刊。

29)「候補に三島氏　ノーベル文学賞」『読売新聞』1965年９月25日朝刊。

30)「三島氏は若過ぎる？ノーベル文学賞」『朝日新聞』1965年９月27日夕刊。

31)「最終候補に三島氏も　文学賞は今夜発表か」『朝日新聞』1965年10月15日朝刊。

32)「谷崎、川端、三島氏らが有力　『ノーベル文学賞』20日に発表」『毎日新聞』1966年10月17日夕刊。「三島氏らも候補　20日発表　ノーベル文学賞」『読売新聞』1966年10月17日夕刊。

33)「三島由紀夫氏が候補に？ノーベル文学賞」『朝日新聞』1967年10月２日夕刊。同内容の記事は以下にもある。「三島由紀夫氏ことしも候補　ノーベル文学賞」『毎日新聞』1967年10月２日朝刊。「三島由紀夫氏、候補に　ノーベル文学賞」『読売新聞』1967年10月２日夕刊。

34)「ノーベル文学賞候補といわれて……」『時（Epock）』第５巻第５号、1962年５月。以下の全集所収のものを利用した。『谷崎潤一郎全集』第26巻（中央公論新社、2017年）、362頁。

35)「ノーベル賞と谷崎潤一郎」『サンダー毎日』1962年７月15日号、25頁。以下の全集にも収録されている。前掲『谷崎潤一郎全集』第26巻、366頁。

36）“Nomination and Selection of Literature Laureates,” ＜https://www.nobelprize.org/nomination/literature/＞, 28 September 2018.

37)「日本から三作家　ノーベル文学賞候補　マーチンソン選考委談」『朝日新聞』1962年３月６日朝刊。「ノーベル文学賞をめぐって　権威ある推薦機関を」『朝日新聞』1962年３月12日朝刊。「日本人作家三人も候補に　ノーベル文学賞について語る　スウェーデン作家マーチンソン氏」『毎日新聞』1962年３月６日朝刊。「ノーベル賞への招待状」『サンデー毎日』1962年３月25日号、22頁。

38)「“三者委で推薦を”　ノーベル文学賞　芸術院などへ文書」『毎日新聞』1962年3月17日朝刊。

39)「副会長に伊藤整氏　日本ペンクラブ」『読売新聞』1962年４月３日朝刊。「文芸家協会から丹羽氏　ノーベル文学賞推薦委に」『読売新聞』1962年５月８日朝刊。「三委員、推薦リストを出す　ノーベル文学賞候補」『朝日新聞』1962年６月26日夕刊。「ノーベル文学賞候補者　日本側の推薦状を送る」『毎日新聞』1962年６月27日朝刊。「ノーベル賞候補作家を推薦」『読売新聞』1962年６月27日夕刊。

40)「ノーベル文学賞は美人投票？　文芸家協会　三人委代表選出持ち越し」『読売新聞』1962年４月７日夕刊。

41）同上。

42)「文芸家協会から丹羽氏　ノーベル文学賞推薦委に」『読売新聞』1962年５月８日朝刊。

43)「三委員、推薦リストを出す　ノーベル文学賞候補」『朝日新聞』1962年６月26日夕刊。「ノーベル文学賞候補者　日本側の推薦状を送る」『毎日新聞』1962年６月27日朝刊。「ノーベル賞候補作家を推薦」『読売新聞』1962年６月27日夕刊。前掲「ノーベル賞と谷崎潤一郎」、24 ～ 25頁。

44）川端康成、三島由紀夫『川端康成・三島由紀夫往復書簡』（新潮社、1997年）、143頁。

45)「ノーベル文学賞候補　推薦委員に芹沢氏」『朝日新聞』1969年２月２日朝刊。

46)「ノーベル文学賞候補　推薦委員に芹沢光治良氏」『毎日新聞』1969年２月２日朝刊。

47)「ノーベル文学賞推薦委員に　芹沢光治良氏を委嘱」『読売新聞』1969年２月２日朝刊。

48)「芹沢光治良氏　ノーベル文学賞の推薦委員に」『毎日新聞』1972年12月26日夕刊。

49)「ノーベル文学賞候補　瑞典から推薦を依頼」『毎日新聞』1950年２月26日朝刊。「雑記帳」『毎日新聞』1950年３月３日朝刊。『読売新聞』もこの依頼を報じ、「日本が候補作品の推薦を依頼されたのはこれが初めてである」としている。「ノーベル文学賞　候補作品推薦、ペンクラブへ依頼」『読売新聞』1950年２月26日朝刊。

50）前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル文学賞と日本：日本人初の文学賞候補、賀川豊彦」（1）、９～10頁。“Nomination and Selection of Literature Laureates,” ＜https://www.nobelprize.org/nomination/literature/＞, 28 September 2018.

51）“Facts on the Nobel Prize in Literature,”＜https://www.nobelprize.org/prizes/facts/facts-on-the-nobel-prize-in-literature/＞, 28 September 2018.

52）ノーベル財団規約第４条。“Statutes of the Nobel Foundation,” ＜https://www.nobelprize.org/about/statutes-of-the-nobel-foundation/＞, 28 September 2018.